

キ入  
應時十  
山川  
鶴洲  
イフ  
洞山  
柳水

惣角力三百二十五番  
内百四十一番 西勝  
百四十一番 東勝  
持四十三  
勝負ナシ  
点揚之次第  
一 五百三拾点 百五十 百五十 大崎 曉猿  
一 五百三拾点 百八十 百八十 山川 雲流  
一 全 百七十 百八十 田布施 嵐扇  
一 四百九拾点 百五十 百五十 全  
一 全 百二十 百二十 山川 淇翠  
一 四百六拾五点 百五十 百五十 指宿 水哉  
以下略之 指宿 清書室 柳水

「ウ」

「(42・オ)」



菊月鳥  
大崎  
曉猿雅丈  
執筆  
榮静

「(43・オ)」



寅五月角力之式

行司

東温人三雀

西指宿柳水

〔ウ〕

全 艸風	大崎 梅好	全 禎尚 百十五 百三十	全 淇翠十	山川 蓮水十五	花尾 一兆十五 二十五	高江 両眠	エイ 琴水十五	一醉十五山	郡山呉人十五	エイ乙笑二百十五
イフ 未柳	イフ 楽静	大始良 胡蝶	イフ 亀盃	大崎 季央	全 童風	全 楽風	イフ 水哉	指宿梅子	全遠山	亀盃

〔ウ〕

(40・オ)

山川 嵐醉二十五	水引 厂子	温人 三雀十五 十五 五	山田 吸瓢	山川 艸蛙十五 十五	山川 笑流十五 十五	川辺 景霽	田布施 嵐扇十	エイ 風曲二十	高江 似猿十 十	山川 不流百四十
高江 江嵐	山川 雲流	市来 菊壽	大サキ 香松	市来 藪杵	イフ 柳水	大サキ 暁猿	水引 春有	大サキ 暁猿	全 柳翠	全 洞山

〔ウ〕

(41・オ)

[illegible]

全 亀盃(イフ) 全 松繫 郡山 同 柳水(イフ) 鶴洲(ウ) 洞山(イフ) 忘時(キ人) 江嵐(高江) 嵐醉(山川) 菊三(オ) 菊三 菊三(ウ) 菊三 菊三(市来) 温人(三雀)

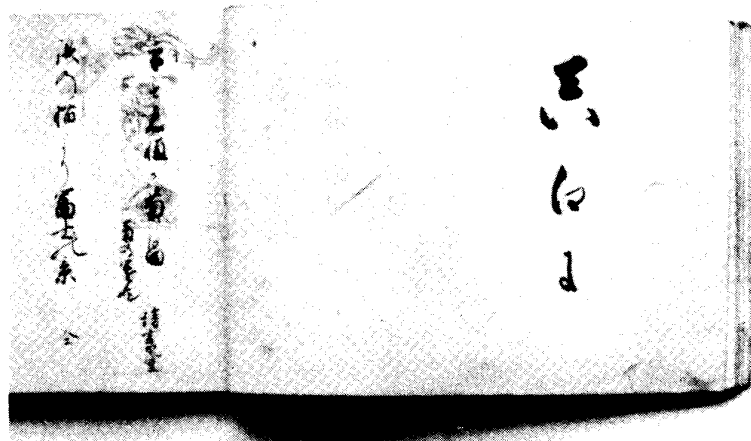


B'	E	H		CX	H	E	H	H	H	H	CX	LV	B'	LP	H	LP	E	LV	E	B' JK
去年は済て琴の責	末の松間の帆掛舟	打解見得し雪の肌		桜の宮を花のしめ	鷺に積れる雪の花	養鷺やとる時雨森	陰斗り飛雪の鷺	雪木綿着るふし姿	はもおちこちの姥桜	忠義を流す湊川	鷺の暮雪や千町田	夜も明ヶ渡る橋の雪	馬糞の山も雪の朝	雪の頭巾やふし額	古歌にも見ゑし田子の浦	雪をいたゝくつくも髪	雪に色増播摩塩	府替の雉六つの花	庭木も埋む今朝の雪	山姫晒ス瀧の糸
一	童	一		童風	兆	楽	雨	楽	雨	楽	雨	楽	雨	楽風	雨眠	水	琴	水	琴	水
(ウ)					(17・オ)					(ウ)					(16・オ)					
H	LZ	LM	FI	FG	CD	E	CU	FI	CS	CU	H	E	LZ	FT	E	H	H	B'	H	E
俄土蔵や雪の朝	顔に立ッ年髪 <small>ツヤツラ</small> の雪	日影に消ぬ雪の肌	光沢衣通りの玉の皮膚	七艸をつむ六つの花	脚絆目に立黒木売り	比良の高根の雪の暮	吉野を埋む桜の雪	雪に尾を引駒か嶽	浪 <small>ウネリ</small> の溶や黒津崎	朝日に木曾の山桜	月の輪冴エし闇の熊	笠嶋雪をうちかふり	御黒書院も雪の朝	雪に新しふる薨	言水譽る富士の山	源氏の咄のしるし旗	塩屋の煙り立にけり	神目の神の月毛馬	富士や浅間の雪煙り	ふしを包むは六つの花
亀	淇	亀	淇	亀盃	淇	季	蓮	季	蓮	季	蓮	季	蓮	季	蓮	季	蓮	童	童	童
(ウ)					(19・オ)					(ウ)				大崎	山川					
CS	H	LP	Y	Y	LO	H	Y	LO	LP	Y	LO	LZ	B'	E	JK	B'	FG	H		LV
雪の馬衣の駒か嶽	春ハ雲見ぬ吉野山	綿舟に積む雪木綿	ふる家迄も雪の朝	六つの花咲三つの朝	玉嶋につむ六つの花	聞にかを出すむめの花	ふ二ハ五月も六つの花	源氏の旗の鷺の森	雪を被きの富士額	土蔵新し雪の朝	群がる田鶴 <small>ヒ</small> の和哥の浦	化粧の皮膚や京童	洗ひ小町の股の雪	玉嶋舟の雪を積ミ	吉野ハ桜の雲の峯	物にうときハ恥さらし	闇夜に恥をさらし紙	雪も古屋の比良の暮		土蔵ハ江戸の八百万ッ
楽	梅	楽	梅	楽	梅	胡	禎	胡	禎	胡	禎	胡	禎	胡	禎	胡	禎	淇	淇	淇
(ウ)						(21・オ)				(ウ)				大崎	山川					

H	H	H	FW	LO	H	LP	Y	E	H	CD	LO	E	Y	B'	JK	H	E	ET		
米を奴か沈 <small>ン</small> に搗き	もみちの山も雪にきへ	もろこし舟や帆のミゆる	身に年を積 <small>ム</small> 鬚の雪	頭につもるふしの雪	外の花垣の朧月	寢覚の里の雪の朝	月夜の畠や玉嶋路	みがき切たる刀鯨	闇に採ふる雪の陳	尾花は野辺の化粧筆	玉嶋綿の盛時	伊豫の松原帆掛舟	氷室取る日は裸ふし	雪に色増す梨子の花	忘れ雪とや峯の桜	土蔵の年を長 <small>ケ</small> し雪	銀の猫より富士の景	雪と見恒か菊畠		
全	全	全	郡山 巢父 (11・オ)	郡山 天民 (11・オ)	全	全	久見崎 仙花	全	川ナベ 飛入 (ウ)	郡山 樵夫	川辺 清水	全	イフ 遠山 (10・オ)	全	全	楽静	全	清書堂		
H	Y	E	Y	LO	FG	Q	FW	LP		LV	FT	Y	H	LV	FW	E	CX	FG	CX	LM
時を寺子の雪こかし	恋風寒し雪の脛	雪に朝起氷わり	雪にはれたるふし額	幽霊かくる綿畠 <small>ケ</small>	ふし形につむ雪木綿	桜の幕や布屋張り	雪をかつきし年木売	暮に積家の平の雪	鷺の雪と上下敷	松のみとりに雪の鷺	雪の肌着の無垢仕建	雪の化粧やふし額	吹揚の濱綿荷くり	玉川の景六つの花	翁の髪も枯尾花	忠義の鏡赤穂塩	綿つむ娘か脛の雪	帰朝の舟の帆一盃	落花の雪のよし野山	雪にかくる、坊主鬼
遠	呉	遠山	郡山 呉人 (13・オ)	乙	乙	キ	乙	キ	乙	乙	乙	乙	イフ 乙笑 (12・オ)	温人 三雀	全 応時	全 巽笑	全	タカエ 江嵐 (ウ)		
LO	FI	H	FG	R	H	FW	H	FW	E	E	Y	CU	B'	CD	E	E	LO	LP	LO	R
玉嶋の秋綿畠 <small>ケ</small>	御目か月毛の寮の駒	左官老後の花作り	菊に仕着の綿の秋	大小鯨の洗ひ切	万弩を放つ月毛馬	限なくうゆる雪月夜	松の見掛や帆掛舟	雪の八重着や山の襟	雪の重荷や松の枝	晒の瀧や奈良の里	敵をおとしの一夜堀	よし野はなへて花の雪	墨にハ染んふしの山	雪の磨ける玉津嶋	足並揃ふ月毛馬	雨にもぬれぬ鷺の色	むれ居る鷺ハ難波潟	墨絵埋むる雪のふし	煙りを埋む富士の雪	立よりてミる瀧の糸
琴	水	琴	水哉	琴水	梅	一	梅	一	梅	一	梅	一	梅子	一	一	一	一	一	一	一
(ウ)				(15・オ)					(ウ)				(14・オ)							(ウ)

LM	出舟の高帆見掛けて送り状	全	〔ウ〕
E	ふむ足か地につきかぬる飛脚道	全	仙桃
E	飛船とて隠岐の沖守り走り乗	全	
Y	提婆居ぬ間に韋駄天の再興寺	全	山川
LM	ほのくくと明る阿漕の網の勢子	全	イフ
FG	時花医に気もせき虫の薬取	全	イフ
H	また元氣杖ハ忘れて戻り付	全	〔6・オ〕
H	風先を走り抜るや花見舟	全	
E	天虫時飯も桑名の渡守り	全	
E	足早に夕日ちらめく油売り	全	
FG	満作や六つから陸奥の刈穂時	全	山川
Y	足も空に飛や初ねの鰹壳	全	鶴洲
H	弓勢に光院の矢の使触	全	〔ウ〕
CU	鎧師を我もく々と責メ鞆ミ	全	大始良
LV	韋駒 <sup>(駄)</sup> 天の足軽ならん早飛脚	全	龍口
E	麦刈の鎌の手早し陸奥の賤	全	如月
E	傘鉾に幾夜赤目を張明し	全	〔7・オ〕
E	聞出す重耳迎ひの駕籠軽し	全	鯉子
FT	鱗足間に合兼し鵜茅茸	全	〔7・オ〕
H	先状に着座あらせぬ御幸の場	全	山月
H	初昇五月前から田植うた	全	可笑
		全	〔ウ〕
Y	日をきって頼の厂の刀磨	全	イフ
H	早癖のはなれぬ弓の失の使	全	イフ
H	せきつまる天下の咽を川普請	全	イフ
B	笠飯を差出す旅の俄客	全	イフ
Y	束ね髪田植の娘ハ郭公	全	イフ
Y	蝶の紋飛んで行野のなたね時	全	イフ
R	唐崎や紺屋ハ雨のもよふ書	全	清書堂
Y	山形も近寄る雨の宮普請	全	〔8・オ〕
H	順風に船頭も陸に残しおき	全	水引
H	早苗とる五月なかはのよめ入ハ	全	曇駝
H	あすまでの花の盛と聞からに	全	曇啞
E	花の宴取ちらしたる俄あめ	全	
H	はなれ馬若の花園駈まわり	全	
		全	〔9・オ〕

真白に





## 〔閏七月鷺松点雜俳集〕

[illegible]

H R R B' B'

雨乞に召す能因の通しかこ

尊トさに押シへし合の御遷宮

村雨の近き追手や笠置落

染兼る師走紺屋の雪木綿

お咄しと帆掛けて走る□船 セン

○高江 山川

「嵐醉」

「菊」

「三」

（3・オ）



LV	H	B'	LP	H	FT	H	FI	B'	LO	LO	CS										
出舟を見掛て足か地につかす	山こへて飛脚立寄乳母の里	山の音に落る平家の隅田川	兄の有る知れ赤兎馬に諸鎧	衣川流て名こそせき兼る	今日こそハ出日和といふ難波口	せきむしに医師の薬と聞からに	つかね髪取揚ださぬ五月時	出日和と時雨たつ田の跡嵐	花を見に行暇もなし時花医師	雨雲をかぶる日和の傀儡師	近寄りし春を一重に二重垣	覗かれぬ瀧のさくらも都落	須广内裏笛も落武者あわれなる	角力日の間に大坂の関素麵	走り行馬に身をかる早飛脚	野も山もたかやす時に成たれは	染物屋師走の雪も蹈散らし	牛の尻叩く時雨の廻り道	織機に綾も切れたり七日前	黒僧も足摺小木の大施我鬼	
全	郡山 眠龍	全	全	イフ 芦泉 (5・オ)	全	全	全	全	イフ 童風 (ウ)	全	全	全	全	全	イフ 亀盃 (4・オ)	全	郡山 松繁	イフ 洞山	イフ 鶴洲 (ウ)	山川 洞山	イフ 洞山

## 翻 刻

凡 例

本分は、原文を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便をはかるため左の要領に従った。


(1) 文字はおおむね現行通用のものに改めた。しかし当時慣用の嶋・只・艸・鴈・厂・躰・哥・嫩・迨・菱・庁など、わずかながら異体字・略字体を用いたものもある。

(2) 清濁・仮名遣いは原本通りである。

(3) あきらかに誤りと思われる部分には(ママ)、宛字には( )内に正しい文字を記し脇に付した。

(4) ミセケチ訂正は、ミセケチを左に、訂正文字を右に統一して記した。本文の左に記されたルビ・書き入れは右に移した。

(5) 丁付は(1オ)・(ウ)のように簡略にした。

(6) 本文が擦れて判読困難な箇所は  とした。

(7) 駒点・印点については、下に示すように模写図を作り、ABC……の記号で句の上に記した。駒点A、A'は墨、他の印点はすべて朱である。

## 〈駒点・印点図〉



れを番えて勝負を判しており、全部で三百二十五番がなされたもの  
うである。

作者については薩摩の指宿・水引・市来・山川・喜入・郡山・高江・  
川辺・久見崎・頼娃・田布施、大隅の大始良・山田・日向の大崎などの  
人々であつて、本書は清書堂で催主の柳水と執筆の楽静から、最高点を  
得た暁猿に賞品として九月に贈られたものである。用いられている大小  
さまざまな点印は、既紹介の文化十年のものに全く一致するものである。  
終りに西口裕吉氏並びに上山秀夫氏に深謝申し上げる次第である。

（大内）。

# 雑俳集『閏七月鷺松点雑俳集』

——南九州の国文学関係資料（十四）——

## 解 説

○『閏七月鷺松点雑俳集』

横本・写一冊（志布志町 上山秀夫氏蔵）

本集は国分市の西口裕吉氏が発見され、原本を借用して筆者のもとへ持参されたものである。例によつて初めに書誌的なことを記しておこう。袋綴じ、横本一冊、たて一六・二センチ、よこ二三・三センチ。字高一四・八センチ、一丁片面五句書き。全四十三丁（但し現存第一紙は半丁を逸している）片面を切り取った残りの裏側が表紙として現在綴じられており、白紙のままで題名については何の記載もない。

現存の形から見て本集は、恐らく前半部分のかなりの枚数が散逸された不完全なものと見られる。既に翻刻ずみのもので明らかなごとく、こうした雑俳興行の場合、前句題と笠題との三つ一組で出題するのが普通

橋 口 晋 作  
福 井 迪 子  
大 内 初 夫

であつて「点揚之次第」から見ても本集はまた三題であつたようである。従つて第一の前句題とその付句、第二の前句題とその付句若干の部分が失われたものと思われる。現存部分の初めの前句題は不明とするほかない。笠題のみは残つていて「真白に」である。

点印を施した宗匠は鷺松である。鷺松点のものでは文化十年亥年の雑俳集を本年報第十一号に翻刻紹介済みである。鷺松はこの年七十二歳であることは、巻末の記載で明らかであつた。とすると本集の閏七月は何年に該当するのであろうか。七月が閏月であつたのは年表によると、文化十年より十六年前の寛政九年と、文化十年より二十二年後の天保六年とが、これに近い年である。しかし、天保六年だとすれば鷺松九十四歳となつて無理なことにように思われる。とすれば本集は鷺松五十六歳の年の寛政九年の成立と推測される。なお、巻末に「寅五月角力之式」とあるが、寅歳はその三年前の寛政六年がこれに当たるようである。「角力之式」については詳しいことを知らないが、作者を東西に分かつてこ